



サシバ生息環境

はじめに

「サシバプロジェクトin大阪」は、大阪府のサシバの生息状況を把握することを目的として、2014年9月に大阪自然環境保全協会、日本野鳥の会大阪支部、大阪市立自然史博物館の有志が集まって発足しました。サシバは個体数の減少が指摘されて、大阪府においてもレッドリストの絶滅危惧I類に指定されており、鳥仲間の間でも観察機会の減少が実感されていました。予備調査を経て2017年に主として大阪南部を中心とした詳細なサシバの生息・繁殖行動調査を行い、小島幸彦氏によって1977-80年に行なわれた詳細な繁殖調査結果と比較しました。その結果、サシバの繁殖ペア数は当時と比べて現在は約4分の1に減っていることがわかりました。都市と自然の506号(2018年5月)には調査結果を、サシバが減った原因と推察される土地利用や田園環境、山林植生の変化などに関連させて解説しています。このときの調査は南大阪における過去との比較を重点に置いたので、2018年は、大阪

南部の未調査地域と大阪北部地域を加えて、大阪府全域のサシバ生息状況の把握を目指した調査を行いました。

調査計画と方法

2018年度の調査では以下の3つのタイプの調査地を選びました。

- A: これまで未調査で、サシバの目撃情報が最近あった地域、およびこれまでの経験からサシバの生息適地と判断した地域
- B: 2017年とそれ以前の調査ではサシバのペア生息は確認されなかったが、生息適地と判断した地域
- C: 2017年とそれ以前の調査でサシバのペア生息が確認された地域。その後の生息状況の追跡。

現地調査は2017年と同じく、猛禽類調査の経験者を中心とする調査員1~数名が双眼鏡などを用いて定点観察および移動観察を営巣活動期の4月中旬から5月に、さらにヒナ育成期の6月から7月下旬に行いました。6月中旬以降の調査でサシバのペアが生息している場合、あるいは繁殖活動を継続している場合は

繁殖「ペア生息」と判断しました。

調査対象はサシバだけでなく、その他の猛禽類を含め、それらの飛行経路を1/1万の地形図にプロットしました。さらに個体数、性別、年齢、繁殖に関わる指標行動、狩場の状況、および以前の調査時と現在の生息環境の変化など、生息状況に関わる要素を記録しました。

大阪南部の調査地域は、富田林市、千早赤阪村、河内長野市、和泉市、岸和田市、貝塚市、泉佐野市、泉南市、阪南市、岬町、河南町、柏原市です。大阪北部の調査地域は、箕面市、茨木市、高槻市、豊能町、能勢町で、大阪南部の36箇所の調査地域は延べ78日103人、北部12箇所を延べ39日62人で調査を行いました。

調査結果

大阪南部および北部における3つ

の調査地タイプ別のペア生息状況を表-1にまとめています。大阪南部35地域のうち、調査地タイプAでは13箇所中3箇所ですべて新たなペア生息が確認されました。調査地タイプBでは10箇所中1箇所ですべて新たなペア生息が確認されました。なお、3箇所では個体は確認できましたが、繁殖行動の確認(ペア生息)には至りませんでした。調査地タイプCでは13箇所中12箇所ですべてペア生息が確認されましたが、残りの1箇所は個体確認のみでした。

大阪府北部12箇所のうち、調査地タイプAでは4箇所中2箇所は個体確認のみでした。残りの2箇所は調査不足のためか、ペア生息の確認には至りませんでした。調査地タイプBでは4箇所中1箇所ですべて新たなペア生息が確認されましたが、残りの1箇所は個体確認のみでした。調査地タイプCでは4箇所中3か所で

継続してペア生息が確認されました。残りの1箇所は個体確認のみでした。以上の結果を図-1の地図上にまとめました。

サシバ以外の猛禽について

サシバ以外の猛禽類の確認箇所数を表-2にまとめました。ノスリは大阪北部では4箇所ですべて確認され、そのうち1箇所では営巣木と巣立ち直後の幼鳥を確認しましたが、南部では確認されませんでした。

ハチクマは観察期間を8月20日まで延長して調査を行い、北部では2箇所、南部では5箇所ですべて繁殖に関わる行動が確認されました。

その他の猛禽類は、南部でオオタカ2箇所、クマタカ2箇所、ハヤブサ4箇所、ミサゴ1箇所、ツミ1箇所が確認されました。北部ではミサゴが1箇所ですべて確認されました。

表-1. 調査地タイプ別ペア生息状況(数字は調査箇所数)

調査地タイプ	判定	南部				計	北部				計
		○	△	※	×		○	△	※	×	
A.新規調査地		3	3	3	4	13	0	2	2	0	4
B.2017年以前の調査でペア生息が確認されていなかったが、生息適地と判断した場所		1	3	1	5	10	1	1	0	2	4
C.2017年以前の調査でサシバのペア生息が確認された場所		12	1	0	0	13	3	1	0	0	4

○:ペアの生息を確認 △:個体確認のみ ※:調査不足 ×:確認なし(渡りを含む)

表-2. その他猛禽類の確認箇所数

	ノスリ	ハチクマ	オオタカ	クマタカ	ハヤブサ	ミサゴ	ツミ
南部	0	5(1)	2	2	4	1	1
北部	4(1)	3(2)	0	0	0	1	0

():繁殖に関わる行動が確認された調査箇所数

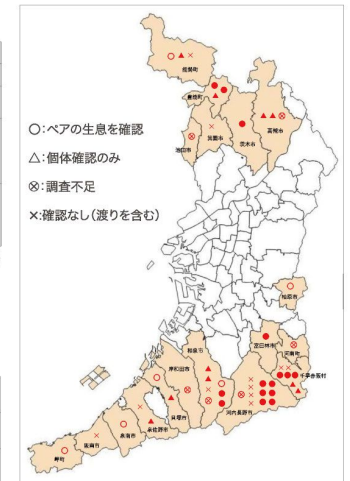


図-1.2018年大阪府サシバ生息状況



巢の上のサシバ(メス)



調査風景

調査結果から見てきたこと

- ・調査地タイプA:17箇所中の南部の3箇所ペア生息が確認され、少ないながらもこれまでの未調査地で、今後ペア生息が新たに見られる可能性があることが分かりました。
 - ・調査地タイプB:14箇所中の南部で1カ所と北部1箇所の計2箇所ペア生息が確認された。一時的にペア生息がないと思われた場所でも、調査を重ねると新たにペア生息が確認されました。
 - ・調査タイプC:17箇所中15箇所(南部12、北部3)で2018年も前年に引き続きペア生息が確認されました。今のところ確認されているペア生息地は安定して維持されているようで、それらの環境条件が維持されればサシバは毎年同じ生息地を利用する可能性が高いと考えられます。
- その他の猛禽類との関係については、ノスリが南部で確認されず、北部でのみ確認されました。ノスリ以外のクマタカ、オオタカ、ハヤブサ、ツミは南部で確認され、ハチク

マ、ミサゴは両方で確認されました。サシバのペア生息地は南部よりも北部で少ないのですが、ノスリの個体数と生息地拡大との関連を今後注目していく必要があります。

なお、2018年7月3日～7月8日の西日本豪雨によって北部3箇所のペア生息地で土砂崩れが発生し、営巣林や狩場が土石流で流されました。特に大阪北部は長時間の記録的大雨に曝されました。被災がサシバひなの巣立ちの時期と重なったためか、その後の調査でサシバは確認されず、ペアと幼鳥は行方が不明となっています。

あとがきと謝辞

大阪府南部において、2015年からサシバプロジェクトが継続して行った生息調査結果と、1977～1980年に小島氏による詳細な調査から報告されたサシバの繁殖地と重ねてみると、40年経った現在でもペア生息が維持されている地域が11箇所あります。これらのサシバの生息適地と新たな調査で確認されたペア生息地との共通点が明ら

かになれば、今後のサシバの生息環境の保全に役立つ知見が得られると考えられます。そのためにはサシバに関心を持っていただける人を増やし、調査に関わっていただける人材確保が今後の課題ともいえます。2019年度も規模は縮小していますが、猛禽調査のできる人材を増やす狙いも兼ねた現地調査を現在継続して行っています。

2018年の本調査には公益信託サントリー世界愛鳥基金(地域愛鳥活動助成部門)の支援を受けています。また、現地調査には多くの方々の献身的な協力をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

参考文献

- 大西、2017、都市と自然408号、大阪府のサシバの現状
- 大西・小室・山本、2018、都市と自然506号、大阪府南部地域のサシバは40年前とどう変わったのか、2017年調査から見てきたこと



ゲンゴロウブナ *Carassius cuvieri*

文・写真 岡本 晋弥(淀川水系イタセンバラ保全市民ネットワーク理事)

琵琶湖-淀川水系の固有種で、コイ科のフナの仲間、ゲンゴロウブナ *Carassius cuvieri* という種類を皆さんはご存知だろうか。ヘラブナ釣りで有名なヘラブナ(カワチブナ)は、そのゲンゴロウブナの養殖品種である。大阪では南部地方のため池でカワチブナの養殖が盛んである。はじまりは明治末ごろである。河内の人が淀川や巨椋池で採取した体高の高いフナをため池で飼い始めたのがはじまりで、それ以降、体高の高いフナを選び累代を重ねてきた大阪府の特産魚であり、生産量は全国トップ、各地に出荷されている。よって移植により全国各地の湖沼と河川下流域に分布する。中表層で生活し、主に水中の植物プランクトンを鰓耙で濾してとって食べており、その為フナの仲間でもっとも鰓耙数が多い。(鰓耙とは魚類の鰓の一部で、口から吸い込んだものを固形物と水とに分離する濾過器官)繁殖は、春～初夏にかけての増水時に、水草などに卵を産み付ける。成長が早く、1年で体長10cm、2年で18cm、3年で30cm、最終的に大きな個体では60cmに迫るまでに成長する。琵琶湖では、あまり沖合に出て行かないギンブナに対し、このゲンゴロウブナは沖合を主に生息場所としている。

形態的な特徴としては、「背と腹の両方が張り出し、体高が高い」「口先が左右に広く少し上向きで唇は薄い」「目の位置が頭部・顎部までの

距離に対して中央」「尾鰭の付け根が細い」「水の流れを感じ取る側線に平行して縞模様が何本か見える(側面背中側のウロコ1枚1枚の根元に黒いシミがあるため、連なって縞模様に見える)」などがあり、フナ属では唯一、種としての独立性が外見から感じられる。

野池やダム湖などに放流されて半野生化したものや、自然に繁殖し成長した個体は警戒心が強く、釣り上げるのが困難であることが多いが、そのような魚体をつり上げようとする愛好者も多く、多種多様な装備や釣り竿が販売され、高い竿では30万円を越えるものもある。

ゲンゴロウブナは環境省レッドリスト(2013)で「絶滅危惧IB類」に指定されている。



淀川水系イタセンバラ保全市民ネットワークの城北ファンド定期保全活動中に、地引き網で捕獲された全長約35cmの個体。(2019年5月19日)



淀川水系イタセンバラ保全市民ネットワークの庭窪ファンド定期保全活動中に、横で竿を垂れる「ヘラブナ師」。(2017年9月10日)